

37	香川大学教育学部附属高松中学校	27～30
----	-----------------	-------

平成 30 年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

これからの時代に必要な資質・能力「コミュニケーション能力」、「創造的思考力」を育成するための新領域「創造表現活動」を設置し、表現に関する教育の充実をめざした教育課程の研究開発

2 研究の概要

これからの時代に必要な資質・能力「コミュニケーション能力」、「創造的思考力」を育成するための新領域「創造表現活動」を設置し、表現に関する教育の充実をめざした教育課程の研究開発を行う。新領域「創造表現活動」は、「プラム」と「人間道徳」の2つの小領域で構成され、それらの学習によって、コミュニケーション能力、創造的思考力を育むことができるようにするために、「伝えること」、「対話の質と量」、「価値の更新」を育成の視点として位置づける。そこで、プラムは相手意識をもったよりよい表現ができるようになることをめざす活動、人間道徳は学年団単位のプロジェク型の学習を通して自己の生き方・在り方を問い直す活動とする。検証は、資質・能力に関するアンケート調査、目指す生徒の姿の実現状況、及び外部評価等による。これらを踏まえ、今後の中学校教育の在り方に対する提言を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

研究の目的—これからの時代に必要なコミュニケーション能力、創造的思考力を育む—

これからの社会を考えると、知識や技能の獲得、再生という力だけでは意味をなさない時代が訪れる。そして、個の力だけでなく、価値観や文化の異なる他者との関わり合いの中で最適解を生み出していくことが求められる。そこには、集団の中で機能する協働的な能力が必要であり、他者との関わりの中で自分の考えを深めたり、広げたりしていかなければならない。つまり、これからの変化の激しい予想が困難な社会に対応して、自分と異なった考えや思いをもつ人とも対話を重ね、主体的によりよい未来を創造していく資質・能力が求められている。そこで、新領域「創造表現活動」を教育課程に位置づけ、これからの時代に必要なコミュニケーション能力、創造的思考力を育む。

【研究仮説】

相手意識をもったよりよい表現を追求するプラムと、プロジェクト型の学習を通して自己の生き方・在り方を問い直す人間道徳で構成された「創造表現活動」を設置した教育課程を開発、実践することにより、変化の激しい予想が困難なこれからの時代を生き抜くために必要なコミュニケーション能力、創造的思考力を育成することができる。

(2) 教育課程の特例

全学年に領域「創造表現活動」を新設する。年間実施時数は全学年 140 時間とする。

第 1 学年では、「国語」、「音楽」、「美術」の一部と、「道徳」、「総合的な学習の時間」を削減する。第 2・第 3 学年では、「国語」の一部と、「道徳」、「総合的な学習の時間」を削減する。削減した教科等については、以下のように対応している。

- ・「国語」…「話すこと」「聞くこと」「書くこと」に関する学習に充てる時間を一部削減し、創造表現活動でその内容に関する活動を、従来よりも長い時間をかけて探求的に取り組むことができるようになることをめざす。
- ・「音楽」…第 1 学年の表現に関する学習に充てる時間を一部削減し、創造表現活動で長い時間をかけて取り組むことができるようになることをめざす。
- ・「美術」…音楽と同様。
- ・「道徳」…22 の内容項目については、創造表現活動の様々な体験や振り返りを通して考えたり気付いたりできるようにする。ただし、一つ一つの内容項目を意図的に扱うのではない¹。
- ・「総合的な学習の時間」…従来のよさを生かし、創造表現活動に取り込む。

¹ すべての生徒に 22 の内容項目を保障することはしないが、これまでの実践（生徒のワークシート記述、発言、インタビュー調査等）から、3 年間の創造表現活動で 22 の内容項目については、考える機会に差はあるものの、すべての内容を網羅していた。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

<創造表現活動>

これからの時代に必要な資質・能力のうち、コミュニケーション能力、創造的思考力に焦点をあて、それらを重点的に育成するために新領域創造表現活動を教育課程に位置づけ、表現に関する教育の充実をめざした教育課程を開発した（図 1）。創造表現活動は、相手意識をもったよりよい表現を追求していくプラムと、自己の生き方・在り方を問い直し、価値の更新²につなげる人間道徳で構成する。

プラムでは、これからの社会を生きる上で必要な内容や、各教科と関連した学習内容等を扱い、表現の必然性を備えた学習過程の中で、試行錯誤や成功または失敗経験をしながら、相手意識をもったよりよい表現ができるようになることをめざす。人間道徳では、他者と協働するプロジェクト型の学習を扱い、地域・社会とのつながりを体感できる活動を行う。そして、各授業や単元の節目での振り返りを通して、自己の生き方・在り方を問い直し、価値を更新するとともに、よりよい社会の形成に向けて主体的・協働的に行動できるようになることをめざす。この2つの小領域を通して、コミュニケーション能力と創造的思考力を育成する。

<教科学習>

教科学習は、教科の本質に迫る学習の実現をめざす。創造表現活動を設立して、改めて各教科を学ぶ意義とは何か、なぜ教科を学ぶのかという教科の本質に立ち返り研究を進める。そこで、各教科の本質とは何かを明らかにし、本質に迫るための方略を設定し、教科学習の充実をめざす。

<創造表現活動と教科学習の関連>

創造表現活動では、様々な表現活動や体験活動に主体的に取り組む。その過程では、各教科で獲得した資質・能力などが、総合的に生かされなければならない。逆に、各教科で育成された資質・能力は、創造表現活動において、様々な課題解決場面に活用され、思考力・判断力・表現力は鍛えられ、知識や技能は実感を伴って体得したり、各教科を学ぶ意義の理解が深まったりするなど、より確かなものとなっていく。

また創造表現活動では、各教科の学習内容に関係する題材や学習活動を取り扱い、そのつながりによって、生徒が教科と新領域の有用性を実感するとともに、それぞれの学習の充実を図ることができる。

<教科、領域等のカリキュラム上の位置づけ>

表現に関する教育の充実をめざした本教育課程において、創造表現活動は表現を磨く場、教科学習は表現の基となる各教科で育成すべき資質・能力を育む場となる。そして、特別活動は表現を受け入れる集団形成の場として位置づける。

① 新領域「創造表現活動」の目標

自己の表出を重視した学習を通して、多様な価値観をもつ他者と協働するために必要なコミュニケーション能力と、自己の生き方・在り方を問い直し、よりよい社会に向かって価値を更新し続ける創造的思考力を育成し、よりよい集団・社会の形成に貢献しようとする意欲と態度を養う。

② 本校が育成する資質・能力

○ コミュニケーション能力

本校では、協働的な活動を円滑に行うために必要な資質・能力という視点から、コミュニケーションを対話と捉える。対話は、自分の意見や考えを共有したり、複数の人の意見をすり合わせたりするために行われるものであり、決して一方通行のものではない。そして、その対話によって新たな概念が創造される。そこには、対話に参加している双方ともに自分の意見を伝えることと、他者の意見を聴くことが求められる。対話という観点から考えると、意見を伝えることも聴くことも能動的な行為と捉える。また、これからの時代を考えると、対話の様

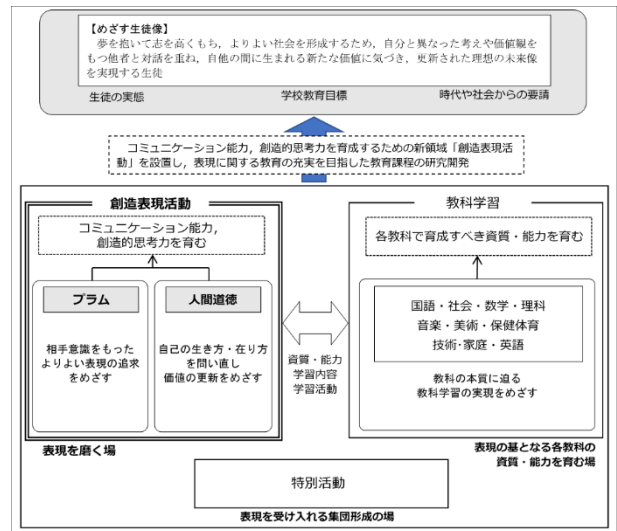


図 1 研究の全体構想

² 本校では「価値」を自分が考えるヒト、モノ、コトの『よさ』と捉える。「価値の更新」とは、自己の価値観をより高次なものに変化させること。「価値を更新する」も同義。

式も口頭でのものだけでなく、様々な手法を用いての対話も含めて捉えていきたい。そこで、生徒が他者と対話するために必要な能力を大きく捉え、本校の教育課程で育成をめざすコミュニケーション能力を「**他者との対話を円滑に進めて、合意形成する力**」と定義した。ここで示している「円滑に」とは、妥協点を見付ける、折衷案を生み出し歩み寄る、説得する、時には場の状況を感じて適切に対応する等のことも含まれる。また、口頭での対話のみに捉われず、様々な手法を用いて対話を円滑に進めることも含まれる。そのような過程を経て合意形成することこそ、他者と協働して課題解決を行うために必要な資質・能力であり、これからの社会を生きる生徒たちにとって必要なものであると考える。

＜創造表現活動でどのようにして育むのか＞

次の2つの視点から育成をめざす。

1点目は、コミュニケーション能力を「伝えること」に焦点をあてて育成を図ることである。本校ではコミュニケーション能力を「伝えること」「聴くこと」という2つの要素が支えていると考えた。対話を円滑に行うためには、自分の考えていることが相手に伝わらなければいけない。そのためには、伝えたい内容を構成することと、伝え方を工夫することが必要である。しかも伝える相手のことを意識した内容や伝え方が求められる。ここでは、言葉を使って、または図や表、イラスト、動画等あらゆるものを活用して自分の想いを相手に伝えることが重要であると考え、相手に伝えるための内容の構成と伝え方の工夫を内容とした学習活動を繰り返し行い、それらを身に付けていくことが、コミュニケーション能力の育成につながると考えた（図2）。



図2 「伝えること」に焦点をあてた学習

2点目は、対話経験を豊富に行うことである。学習の文脈の中で、様々な人たち（学級内の仲間に留まらず、異学年の生徒や学校外の人たちも含む）と行う対話経験が重要だと考える（図3）。そしてその対話から得られる実感（伝わったことにより～～が変わった、伝わらなかったから～～がうまくいかなかった等）が自分自身の対話を見つめ直すきっかけとなるとともに、コミュニケーション能力を高める原動力となると考える。特に、学校生活で接する機会の少ない他者との対話経験は、コミュニケーション能力の必要性の実感につながると考える。



図3 様々な対話経験（学校内外の人たちとの対話）が資質・能力を育む

○ 創造的思考力

創造的思考力とは向かうべき理想の自己や社会といったビジョンに向かって新しい関係をつくり出す働きであると考えられる。つまり、これまでの自分の行動や考え方と向き合い、ヒト・モノ・コトへの見方や考え方を多面的・多角的に問い直し、新たなビジョンや向かうべき理想の自己や社会像を創造することである。予測困難な状況乗り越えたり、正解のない課題を協働的に解決することが求められたりするこれからの社会においては、自他の間に生まれる新たな価値を更新し続け、様々なヒト・モノ・コトとの関わり方を問い続けながら、向かうべき理想の自己や社会像に向かっていくことが求められる。そこで、創造的思考力を「**自己を見つめ、よりよい社会に向かって価値を更新し続ける力**」と定義した。創造的思考力が高まることで、今までとは異なる見方や考え方でヒト・モノ・コトを捉えることができたり、よりよい社会を創造するための新たなアイデアを生み出したりすることができる。と考える。

＜創造表現活動でどのようにして育むのか＞

創造的思考力を育成するために、体験・経験と振り返りの視点で研究を進めることとした。自らビジョンをもって取り組む過程で出会うヒト・モノ・コトへの関わりは、その人の成長に関わる貴重な経験となる。その関わりから得られる気づきにより、これまでのヒト・モノ・コトへの見方や考え方が広がったり、深まったりし、その結果、新たなビジョンの形成にもつながっていく。しかし、経験こそ全てではなく、その経験は自分にとってどうであったのか、自分はどうするべきだったのか、次はどうしたいのか等を深く振り返ることで、経験から学んだことを意味付け、価値付け、内実化することにつながる。つまり、創造的思考力の育成には、どのような経験をするかと、それを振り返りどのような気づきがあり、それを自己とどう結びつけることができるかが重要な鍵となると考えた（図4）。



図4 経験と振り返りの連続が資質・能力を育む

③ 創造表現活動プラム

【目標—何ができるようになるか—】

創造表現活動のプラムでは、これからの社会を生きる上で必要な内容や、各教科と関連した学習内容等を扱い、表現の必然性を備えた学習過程の中で、試行錯誤や成功または失敗経験をしながら、相手意識をもったよりよい表現ができる生徒の育成をめざす。

【内容—何を学ぶのか—】

プラムは、自分の想いを相手に伝えるために必要なことを学ぶ活動である。自分の想いを相手に伝えるために必要なこととは、「伝える内容の構成」と「伝え方」である。これを本校では「表現の要素」と設定する。自分の想いを相手に伝える手段としては、自らの身体を通じて表現する方法（言葉や動き、ジェスチャーなど）と、モノを通じて表現する方法（図やイラスト、制作物等）がある。そして、相手に伝えるためには、伝えることをどのような内容で構成するかと、どのように伝え方を工夫するかが重要になってくる。そこで、プラムでは、身体を通じて表現することとモノを通じて表現することを通して、「表現の要素」を学ぶ活動として設定する。

【方法—どのように学ぶのか—】

i) 生徒がめざすゴール「表現課題」の設定

プラムの学習活動において、生徒は各単元で設定された表現課題を追求する。表現課題は、生徒自らが「表現したい」と思うことができるような課題を設定する（図5）。前述した表現の要素（身体を通じて表現する、またはモノを通じて表現する）がこの表現課題に表れる。表現課題を設定するにあたり、表現への意欲を高めるために、実生活や実社会において必要と感じる課題を設定したり、人間道徳や各教科における表現とのつながりや、学校外の取組とのつながりをもたせたりするなど、各単元の特性に応じて工夫を行う。さらに、表現課題に対して、自分なりの考えや意図、アプローチの仕方等が多様になるようにし、主体的・協働的に学習に取り組むことができるようにする。

また、学年が上がるにつれて、表現する相手が「学校内の相手」から「学校外の人や社会等」へ広がりが生まれ、課題設定が「教師が決めたテーマ」から「自分で決めたテーマ」へと自由度をもたせたりするなどしている。

ii) 試行錯誤場面を意図的に設定した単元構成

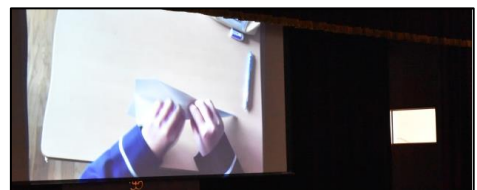
i) で述べた表現課題に向かって生徒はよりよい表現を追求していくが、その過程において表現の試行錯誤が必然的に生じるようなしかけを行う。つまり、失敗を許容し、練り直しの過程を意図的に単元内に位置づける。例えば、伝えたい相手にうまく伝わらない経験や思っている通りに伝えたいという感情が生まれるように、プレ表現場面や他者からの評価場面を単元の節目で意図的に設定する。時には、その道の専門家による評価や専門的な指導を取り入れ、よりよい表現になるために必要な知識や技能、またはゴールへの道筋を学ぶことができるようにする。また、試行錯誤場面では、他者との対話（チーム内の対話、評価者との対話、討論など）が生まれるように、全体または個別に教師が支援を行う。

【評価—何が身に付いたか—】

創造表現活動プラムの評価は、次の2つの観点で行う。

観点	主体的・協働的な態度	表現すること
観点の趣旨	各単元で設定した表現課題やそれに関わる学習活動に対して、どのように取り組んでいるかを見取る。	各単元で設定した表現の要素が身に付いているかどうかを見取る。
評価規準	表現課題やそれに関わる学習活動に対して、自ら意図的に取り組み、試行錯誤を繰り返し、他者と協働しながら取り組もうとしている。	自己の伝えたい想いを、身体またはモノを通じて表現することができる。その際、相手に伝わるように伝える内容を構成したり、伝え方を工夫したりすることができる。

この2つの観点は、よりよい表現の追求を促すための観点であり、創造表現活動で育成を図る資質・能力と直接的または間接的に関係している。どのように取り組んでいるか（主体的・協働的な態度）を見取るなかで、どのような対話を行っているか、どのように合意形成に努めているかを間接的に評価することができる。一方、表現の要素が身に付いているか（表現すること）を見取ることで、コミュニケーション能力を支える「伝えること」が育まれているかを評価することができる。



第3学年プラム「人の心を動かす映像制作Ⅱ
～映像に想いを込める～」

卒業式前日に、卒業生映像作品上映会を行います。テーマは「卒業—私たちが伝えたいこと—」です。上記の内容を踏まえ、卒業前に自分たちが伝えたいこと、そして伝えたい相手を考え、それらが視聴者に分かる映像作品を制作してください。映像作品の時間は2～3分です。各クラスの優秀作品については、卒業式当日にもピロティにて上映されます。

図5 表現課題の例

④ 創造表現活動人間道徳

【目標—何ができるようになるか—】

創造表現活動の人間道徳では、他者と協働するプロジェクト型の学習を扱い、地域・社会とのつながりを体感できる活動を行う。そして、各授業や単元の節目での振り返りを通して、自己の生き方・在り方を問い直し、価値を更新するとともに、よりよい社会の形成に向けて主体的・協働的に行動できる生徒の育成をめざす。

【内容—何を学ぶのか—】

人間道徳では、目標に示す通り、プロジェクト型の学習を通して、自己の生き方・在り方を問い直し、価値の更新をめざす。各プロジェクトのゴールをめざす過程で、自分自身をしっかりと振り返り、今まで気づけなかった価値に気づいたり、ヒト・モノ・コトへの見方や考え方を多面的・多角的に捉え直したりすることができるようになることが、人間道徳の学びの方向性である。つまり、人間道徳の学習内容とは、生徒たち自身で主体的・協働的に進めていくプロジェクトの過程で気付く（出会う）様々な価値そのものである。

各学年のねらいについては表 1 に示す通りである。自分→他者→地域・社会と段階的に視野を広げながら自己を問い直し続け、理想の実現に向け努力し、成し遂げることができるようになることをめざして学習活動を進めていく。さらに人間道徳では、各学年のねらいを踏まえ、プロジェクトを通して生徒に考えてもらいたいことを設定する。これを『重点を置く価値』と設定した。重点を置く価値は、各学年団のねらいにつながる内容であるとともに、これからの社会をよりよく生きるためにぜひとも考えてもらいたい内容として設定している。

表 1 人間道徳の各学年のねらいと重点を置く価値

学年	ねらい	重点を置く価値
第 3 学年	自己実現 様々な経験、多様な人たちとの関わりから、価値を更新し、理想の実現に向けて努力し、成し遂げることができるようになることをねらう。	「個性」 「他者理解」 「社会参画への自覚」
第 2 学年	人間関係形成 価値観の異なる他者（地域や環境等も含む）との関係について理解し、人と人とのつながりや関わり、他者と共に生きることの大切さに触れ、自ら新たな人間関係を構築できるようになることをねらう。	「相互理解」 「個性の伸長」 「よりよく生きる喜び」
第 1 学年	心をたがやす～自己探求～ 自分の行動や考え方を常に問い直しながら、行動につなげることができるようになることをねらう。	「自己理解」 「協力」 「勤労・地域貢献」

【方法—どのように学ぶのか—】

i) 自己の問い直し

単元の中に自分をじっくりと見つめ直す時間を位置づける。様々な活動を経験するだけでなく、その活動で自分は「何を感じたのか。」「何を考えるべきだったのか。」「どのように行動するべきだったのか。」等を深く振り返る場面を、各授業や単元の節目で行うことができるように設定する。

人間道徳では、プロジェクトの活動内容や生徒の実態を踏まえて様々な方法で振り返りを行う。体験・経験そのものがヒト・モノ・コトへの見方や考え方が変わるきっかけとなったり、自分とは異なる考え方や価値観に触れることで、自分自身の生き方・在り方を考えるきっかけとなったりして、生徒一人一人の価値の更新につなげている（図 6）。

ii) 地域・社会とのつながり

学校外の他者、社会とのつながりを生徒自身が体感する場面を意識的に取り入れ、学校外の他者との対話を通して、実社会の有り様を感じ取ることができるようにする。各学年で設定されているプロジェクトは、普段の生活ではなかなか触れることができない地域・社会とのつながりを体感することができる活動としている（図 7）。実際に学校外の人たちとの対話が行われることで、いろいろな生き方・在り方を感じ取ることができる。

iii) 目標の共有・協働

人間道徳は、学年団全体を一つのチームとして活動を進める。活動の内容に応じて、小チームを編成したり、個人で活動を行ったりすることもあるが、基本的には学年団で活動を展開していく。チームでプロジェクトの成功に向かって進んでいくためには、チーム内での目標の共有が必要になる。そこには、個々が考えている理想のゴール像をすり合わせていったり、誰かがリーダーシップを発揮しゴール像を設定したりして、1つの方向性を決めなければいけない。方向性が定まると、今度はゴール像に向かって個々の役



図 6 想いを語る生徒の姿



図 7 地域の子どもたちと触れ合う

割をしっかりと果たし、プロジェクトの成功に向かって試行錯誤したり、お互いの意見を出し合ったりしながら進めていかなければならない。

【評価一何が身に付いたかー】

創造表現活動人間道徳の評価は、次の2つの観点で行う。

観点	主体的・協働的な態度	新たな価値への気づき
観点の趣旨	各単元で行うプロジェクトや単元の節目等で行う自己の振り返りに対して、どのように取り組んでいるかを見取る。	学習活動を通してどのような気づきがあったかを見取る。
評価規準	プロジェクトの成功に向けた活動や自己の振り返り活動等を、自分事として捉え、自ら意欲的に取り組んだり、他者と協働して活動に取り組んだりしようとしている	自他との関わりから、新たな価値に気づいたり、これまでの自己の考えを多面的・多角的に考えたりして、自己の生き方・在り方を見つめ直すことができる。

⑤ 創造表現活動の学習の充実を求めて一目標の実現に向けて一

i) 指導の改善につながる多様な評価方法

創造表現活動の指導の充実を図るためには、量的な変容のみを評価するのではなく、生徒の成長を評価の観点を踏まえて実際の姿や表出物等の質的な変容を見取ることが大切だと考えている。この教師の見取りによって、授業の改善につなげたり、確実に資質・能力を育んだりすることができる。3年間をかけてじっくりと生徒の成長を見取るために、以下に示すような多様な評価方法を用いる。

- ・教師 NOTES ・活動 PHOTO, MOVIE ・ポートフォリオ評価 ・パフォーマンス評価 ・専門家による評価

ii) 指導と評価の充実を図る単元構想シート

創造表現活動の学習を充実させるためには、創造表現活動の目標、プラム・人間道徳は、何を学ぶのか、どのように学ぶのかについて、共通理解を図り、その上で各単元の目標や内容、学習活動等を構想する必要がある。そこで、本校では創造表現活動の単元を構想する際に活用する「単元構想シート」(図8)を作成した。これにより、創造表現活動の本質を見失わずに指導や支援を行うことができると考えた。

iii) 生徒の主体性を高めるための弾力的な運用

創造表現活動は年間 140 時間で構成される。プラムは 11 時間の単元構想が基本で、人間道徳は 70 時間の単元構想で行うことを基本としている。しかし、活動内容や生徒の活動意欲の向上・維持を考慮し、授業時間の取り方を柔軟に変更できるように配慮している。生徒の願いや期待をできる限り実現するために、弾力的に授業時間をまとめ取りすることができるようにしている。これによって、積極的に学校外に飛び出したり、目の前の活動に没頭したりすることが可能となる。

iv) 専門家や地域との積極的な連携

創造表現活動では、学校外の他者との対話や表現に関わる専門家の見方・考え方との出会いも大切にしているため、積極的に専門家や地域と連携を図りながら学習活動を行うことができるようにしている(図9)。そのような出会いから得られる実感は、創造表現活動の目標を達成し、生徒に育むべき資質・能力を効果的に培う要素でもありと考える。

① 表現
自分の思いを『モノ』を通して表現する単元なのか、『身体』を通して表現する単元なのかを示しています。

② 単元の目標
本単元で目指す生徒の姿を示しています。

③ 単元の評価規準
プラムの評価観点に合わせて、評価規準を示しています。

④ 本単元の本質的な問い
本単元を通して生徒に考えてもらいたい問いです。題材や③で示す表現の要素と関連しています。

⑤ 本単元で扱う表現の要素
本単元で何に付けてほしい内容です。④の本質的な問いを考慮して必要となる要素です。

⑥ 表現課題
本単元で、生徒たちが追求していく課題です。単元を通して追求する場合と、単元のまゝとて追求する場合があります。

⑦ 単元計画
11 時間をどのようにデザインするかを示しています。活動の内容に合わせて大まかに示したり、焦点をあてて示したりしています。

図8 単元構想シート（上記はプラム）



図9 演劇専門家との連携

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒を取り巻く環境や生徒の実態を踏まえた目指す生徒像の検討 ○ 創造表現活動部会の設立 ○ 新領域で育成するコミュニケーション能力と創造的思考力の検討および下位項目の検討 ○ 生徒の実態を把握するアンケート調査の開発と実施 ○ 新領域の単元開発及び授業実践 ○ 新領域と各教科との関連の充実を図る学習の開発
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新領域のカリキュラムの見直しと本格的な実施 ○ 1年次の成果と課題を踏まえたコミュニケーション能力と創造的思考力、新領域の内容・学習活動の修正、整理 ○ 育成する資質・能力を育成するための指導と評価の開発

次	○ 教科の提案と授業実践
第 3 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新領域のカリキュラムの見直しと実施 ○ 2年次の成果と課題を踏まえたコミュニケーション能力と創造的思考力、新領域の内容・学習活動の修正、整理 ○ これまでの研究の実践を通しての研究内容や指導方法、評価方法の改善 ○ 本校研究発表会における提案発表及び提案授業の公開 ○ 創造表現活動単元の校内研究授業及び授業討議の実施 ○ 最終年度に向けた研究構想、教育課程試案の修正
第 4 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新領域のカリキュラムの見直しと完全実施 ○ 公開発表会で4年間の研究の経緯とその成果についての提案発表及び公開授業 ○ 研究開発の評価とまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開発表会の成果や課題をもとに研究の修正を行い、新領域及び各教科の取組についての実践のまとめを行う。 ・ 現行の学習指導要領を実施する中学校からの意見を収集し、教育課程を改善する。 ○ 4年間の研究開発の成果と課題をまとめた研究報告書の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 新領域を中心とした新たな教育課程の提案を行う。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第 1 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運営指導委員（6月，12月），外部講師，香川大学教員からの指導・助言 ○ 本校研究発表会の参会者へのアンケート調査による評価 ○ 新領域の試行による成果と課題の分析 ○ 各単元の研究授業の実施による成果と課題の分析 ○ 全国学力・学習状況調査，県学習状況調査結果による本校生徒の学力等の分析 ○ 本校生徒（5月，10月，2月），保護者（11月），教員（11月）へのアンケート調査による研究の評価 ○ 1年次の研究成果と課題を明らかにするカリキュラム評価の実施（生徒へのインタビュー及び教員による座談会）
第 2 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運営指導委員，外部講師，香川大学教員からの指導・助言・評価 ○ 新領域の運用による成果と課題の分析 ○ 各単元の研究授業の実施による成果と課題の分析 ○ 全国学力・学習状況調査，県学習状況調査結果による本校生徒の学力等の分析 ○ 本校生徒（5月，10月，2月），保護者（11月），教員（11月）へのアンケート調査による研究の評価 ○ 新領域の評価方法の見直し，修正 ○ 2年次の研究成果と課題を明らかにするカリキュラム評価の実施（生徒へのインタビュー及び教員による座談会）
第 3 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運営指導委員，外部講師，香川大学教員からの指導・助言・評価 ○ 本校研究発表会の参会者へのアンケート調査による評価 ○ 各単元の研究授業の実施による成果と課題の分析 ○ 本校生徒（5月，10月，2月），保護者（11月），教員（11月）へのアンケート調査による研究の評価 ○ 新領域の評価方法の見直し，修正 ○ 小学校との連携による長期的スパンでの生徒の変容についての意見交換 ○ 3年次の研究成果と課題を明らかにするカリキュラム評価の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ 全校生徒への記述調査及び一部インタビュー調査，教員による座談会 ・ 学習時の生徒の姿及び表現物等の分析
第 4 年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運営指導委員，外部講師，香川大学教員からの指導・助言・評価 ○ 公開発表の参会者へのアンケート調査による評価 ○ 実践事例の分析・検討・評価 ○ 本校生徒（5月，10月，2月），他校生徒（11月），保護者（11月），教員（11月）へのアンケート調査による研究の評価 <ul style="list-style-type: none"> ・ 4年間の取組と研究成果のまとめ，4年次の研究成果の評価 ・ 抽出生徒のエピソード記録の変容調査及びインタビュー調査 ・ 全校生徒への記述調査及び一部インタビュー調査，教員による座談会，外部講師による調査 ・ 学習時の生徒の姿及び表現物等の分析

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 生徒への効果

本研究の成果と課題を明らかにするために、資質・能力に関するアンケート調査結果（表1）と、創造表現活動で見られた生徒の実際の姿やそれを見取った教師の記述等をもとに検証する。

表 2 資質・能力に関するアンケート調査結果

※数値は肯定的回答率%（「はい」「どちらかといえばはい」と答えた生徒）

項 目	質 問	現高校 1 年生		現中学 3 年生		
		2 年時 H28.10	3 年時 H29.10	1 年時 H28.10	2 年時 H29.10	3 年時 H30.10
コミュニケーション能力	班や学級での活動で、みんなの意見をまとめようとしている。	52.2%	72.3%	55.1%	58.5%	60.5%
	友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である。	50.4%	56.3%	40.7%	44.1%	43.7%
	発信をするときは、相手の気持ちを考えて意見を伝えようとしている。	84.3%	92.0%	92.4%	91.5%	89.1%
	質問をするときは、質問内容を考えて適切な質問をしようとしている。	88.7%	92.0%	94.9%	91.5%	89.1%
	授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。	65.2%	82.9%	74.6%	78.8%	82.4%
	自分の考えを他の人に伝えるとき、表情や態度に気をつけている。	78.3%	87.5%	89.0%	81.4%	85.7%
	自分と違う意見をよく聞き、良いものを取り入れようとしている。	83.5%	92.9%	89.8%	96.6%	94.1%
	現時点での自分の伝え方で、自分の考えは相手に正しく伝わっていると思う。	65.2%	77.5%	60.2%	71.2%	63.9%
	学級の友達との間、生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	77.4%	92.0%	83.1%	91.5%	89.9%
	発言する人の気持ちを考えながら、話を聞こうとしている。	77.4%	89.3%	89.0%	91.5%	92.4%
創造的思考力	現時点での自分のコミュニケーション能力は将来の仕事や夢にプラスに働く。	69.6%	81.3%	78.8%	77.1%	74.8%
	自分には長所がある。	53.9%	67.0%	67.8%	70.3%	69.7%
	地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。	49.6%	60.7%	61.9%	51.7%	43.7%
	私の参加により、地域や社会を少し変えられるかもしれないと思う。	51.3%	58.9%	46.6%	44.1%	45.4%
	自分自身についてじっくり見直そうとしている。	70.4%	82.1%	78.8%	78.0%	74.8%
	見方や考え方の違う人と接することは、見方や考え方を深めることにつながると思う。	87.8%	93.8%	89.0%	94.9%	91.6%
	課題を解決しても、新たな課題や疑問がないかと考えようとしている。	59.1%	71.4%	61.9%	67.8%	66.4%
新しいことを始めても、出だしてつまらずとあきらめてしまう。	43.5%	56.3%	38.1%	39.0%	46.2%	

※アンケートの回答は「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」の4段階評価で行った。

ア. コミュニケーション能力

＜アンケート調査結果と創造表現活動の生徒の実際の視点から＞

本校では、コミュニケーション能力を「他者との対話を円滑に進め、合意形成する力」と定義し、次のような姿をコミュニケーション能力が高まった姿と設定し、創造表現活動の学習の中で見られることをめざした。

- 自分の想いを、様々な方法を使って伝えることができる生徒
- 自分の想いを、相手意識をもって伝えることができる生徒
- 状況に応じて合意形成することができる生徒

表 2 のアンケート調査結果から、「班や学級での活動で、みんなの意見をまとめようとしている。」の項目について、肯定的回答をした生徒が増加した。創造表現活動では、すべての単元で小グループやチーム等の複数人数での活動が行われている。よりよい表現に向けて、自分たちでグループ内の意見をまとめたり、課題解決をおこなったりする機会が数多く保障されており、なおかつ目の前の活動に楽しさを感じながら取り組んでいることが要因ではないかと考えられる。このことは、教員座談会の記録及び公開授業参観者の意見からも分かる（図 10）。

また、「発信をするときは、相手の気持ちを考えて意見を伝えようとしている。」「質問をするときは、質問内容を考えて適切な質問をしようとしている。」「授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。」の項目について、肯定的回答を示す生徒が多い。このことは、プラムの学習で、自分たちの想いを伝えるためには、伝えたい「内容を構成する」ことが大切であることに気づかせることをめざして行ってきたことが要因ではないかと考えられる。生徒の振り返りワークシートからも、「内容を構成する」大切さに気付いていることが分かる（図 11）。

また、「自分と違う意見をよく聞き、良いものを取り入れようとしている。」「学級の友達との間、生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」「発言する人の気持ちを考えながら、話を聞こうとしている。」の項目について、肯定的に回答した生徒が増加した（または高い回答率を維持している）。これらの項目は、話を聞くことに関わる内容である。聞くことについては、創造表現活動で重点をおいて取り組んだことではないが、プラムで伝えることに焦点をあてていたことが影響した

【教員座談会記録より】

・プラムでは、取り組むべき表現課題や題材、人間道徳では取り組むプロジェクトが成功した時のビジョンが描けるかどうかが大変だと思う。
・自分から進んで話し合いに取り組んでいる授業が多くなったと感じる。生徒が楽しそうに取り組んでいる姿が印象的だ。

【公開授業参観者の意見】

・ほとんどの生徒が、夢中になって取り組んでいることに驚いた。教科学習にはない、魅力が創造表現活動にはあると感じた。

図 10 教員座談会記録、参観者記録

・今回セリフを考える上で、裁判において弁護士側と検察官側の視点は真逆で矛盾していることがあり、ストーリー性を保つのが大変でした。相手の意見の反論に自分の意見の強調をくっつけることが大切だと思いました。
・今回は作ってくれた脚本に添削などをして1回通してみました。全体を見ていて、やっぱり弁護側がとて弱いな、と感じました。これから、異議や新しい証拠を作ってみんなが悩むような作品にしたいです。

図 11 振り返りワークシートの記述

のではと考える。実はそれによって相手の気持ちを理解しようとし、伝えたい内容や伝え方を考えたり、話し合いを円滑に進めていくためには、相手の意見を自分なりに受け入れたりすることが重要であることに生徒自身が気づいたと考える。生徒のワークシートや教師の授業記録からもこのことが分かる（図 12）。

<外部評価の視点から>

運営指導員からの評価や、公開授業に参会された先生方からの評価からも、コミュニケーション能力に関する効果が分かる（図 13）。

<課題>

表 2 から、予想に反して成果が表れなかった項目は「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である。」である。コミュニケーション能力の高まりを肯定的に自己評価しながらも、得意であると認識するまでには至らなかった。得意と認識するためには、発表することを他者に称賛されたり、認められたりする経験や実感が必要である。また、「現時点での自分の伝え方で、自分の考えは相手に正しく伝わっていると思う。」の項目については、現高校 1 年生には成果が見られたが、現中学 3 年生には成果が見られなかった。この原因については、今後生徒へのインタビュー調査をもとに検証したい。

イ. 創造的思考力

本校では、創造的思考力を「自己を見つめ、よりよい社会に向かって価値を更新し続ける力」と定義し、次のような姿を創造的思考力が高まった姿として設定し、創造表現活動の学習の中で見られることをめざした。

- 新たな価値に気づくことができる生徒
- 今までとは異なる見方や考え方で、自分とヒト・モノ・コトとの関わりを捉えることができる生徒
- よりよい社会を創造するための新たなアイデアを生み出すことができる生徒

<アンケート調査結果と創造表現活動の生徒の実際の視点から>

表 2 のアンケート調査結果からは、「見方や考え方の違う人と接することは、見方や考え方を深めることにつながると思う。」という項目についてのみ、成果が見られた。このことは、人間道徳の学習の中で、学校内の仲間のみならず、多くの人たちと関わり合いながら、プロジェクトの成功に向けて課題解決を行ってきたことが要因だと考えられる。生徒のワークシート記述からもこのことが分かる（図 14）。

アンケート調査結果には表れなかったが、教師の見取りとから、学習でめざした生徒の姿が多く見られた。例えば、生徒 A は 1 年時の人間道徳で「震災の被害をうけた人たちに自分たちができることは何か」とみんなで考えた時、「このこと自体に、何の意味があるか分からない。」と発言した。しかし、3 年時の人間道徳で、「僕のことによって、周りの人たちが幸せに感じることを、僕の幸せだ。」と発言した。生徒 A は、今までとは異なる見方や考え方で、自分とヒト・モノ・コトとの関わりを捉えることができるようになり、3 年時の人間道徳では、地域の人たちを楽しませるために、様々なアイデアを生み出していた。

<外部評価の視点から>

運営指導員からの評価からも、創造的思考力に関する効果が分かる（図 15）。

<課題>

「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。」「私の参加により、地域や社会を少し変えられるかもしれないと思う。」の項目については、思うような成果は得られなかった。人間道徳では、地域や社会とのつながりを実感できるような体験を数多く保障したり、実際に地域や社会に向けて発信する機会があったりしたにも関わらず、肯定的回答率に高まりは見られなかった。

・たくさんの考え方を持つ人と関わり合って自分の意見を発信し、また相手の意見を受け取る。このような話し合いが日常でも行われると一人一人の考えが深くなっていくと思うのでこれからも心がけたいです。

図 12 振り返りワークシートの記述

【10月26日公開授業記録にて】

・円滑に進めるとなると、スマートに進めることとなるが、実際は泥臭く粘り強く進める力が身につけていると感じた。伝えると内容や構成を研究しているからこそ、相手の内面を感じたり、感受性を学ばせたりしているほうが、強いのではないかと感じた。
・最初は、相手意識というのが前面ではなかったが、最近ではそのような力が身につけてきたのだと思った。伝えるということに焦点を当てたからこそ、相手意識や相手のメタ認知等も気にするようになってきたのであろうと感じた。

図 13 運営指導委員、公開授業参会者の評価

(省略) …1 番印象に残っているのは福祉体験の時で、「この活動は意味ないのではないか。茶番ではないのか」というのがあって、その時は自分でもよくわからなかったが、時間がたつてまた考えてみると「じゃあそこで働く人は意味ないのか? いや、そうではないな」と思い、その私の答えは「この活動には、だれかのためとはずつとその人のためになるわけではないけれど、だれかを笑顔にすることに意味があると思う。」ということになった。こうして 1 つ 1 つの活動で体験や振り返りを通してじっくり考え、言葉にすることで新たな考えや価値観を持つことができた。

図 14 振り返りワークシート記述

・アイデンティティ形成の場になっている。他の人と違って自分はどうかだろうかや、過去、現在、未来とつながって自分ってこういうものなのかなということなどをアイデンティティといったりする。明確にいえる人はいないが、こういうものかなというものを持っている。そういうのを形成するのが青年期だといわれている。…中略…

プラムや人間道徳で社会と触れる機会が、自己を多角的に見る機会を意図的に作っているのが創造表現活動ではあると感じた。その中で自分と他者の違いを気づく場が豊富にある。過去、現在、未来の自分と向き合う場になっている。

図 15 運営指導員からの評価

② 教師への効果

表 3 は、教師アンケートの結果（平成 28 年度～平成 30 年度：N=20）である。アンケート調査結果を見ても分かるように多くの教師がこのカリキュラムに手ごたえを感じている。ここには、教員間で何度も創造表現活動の目標や内容、方法を議論し、めざす具体的な生徒の姿を共有できたことが大きいと感じる。「研究開発の取組が自分自身にどのような効果をもたらしたか」について記述した内容の一部である。記述内容からも、研究開発の取組が、各教師の教師観や指導観に影響を与えたことが分かる。 ※○年目は本校在籍年数

(1 年目教員)	今までは、教科のみの資質・能力だけを考えることがほとんどだった。そのため、これからの生徒に必要な力を再確認したり、自分自身で吟味したりする機会となり、教育について考えを深めることができた。教科についても再認識することにより、授業内容やスタイルも変わってきたと思う。
(2 年目教員)	1 年目は理解できなかったことが多かったし、生徒の変化もつかめなかったため、よさは分かりにくかった。しかし、3 年生の人間道徳を終え、本当の意味でしんどさや意見の衝突、やりきった達成感を生徒一人一人が感じていたし、1、2 年で（生徒の）成長を判断してはいけなかった。教科の授業を削減されて困ることも多いが、授業の内容をよりシンプルに考えることは多くなった。
(5 年目教員)	学年団で活動するため団の先生方とよく、話をするようになった。そのことで、教科学習だけでは感じ取ることのできない生徒の変化などにも目を向けられるようになった気がする。
(10 年目教員)	コミュニケーションとは何か？道徳とは何かについて様々な考え方に触れる機会が増えた。中学校は教科の特性があるため、教育課程について考える場合、全体で生徒の学びを補償するという視点を失いがちになることがあると分かった。（自教科の枠組みを守りすぎるときがある）

表 3 教師アンケート調査結果（N=20）

※数値は肯定的回答率%（「はい」「どちらかといえばはい」と答えた教師）

No.	質問項目	2 年次 H28. 11	3 年次 H29. 11	4 年次 H29. 12
1	教員間の連携が強くなった	88.2%	93.8%	100.0%
3	自分の教科以外の学習について話をするようになった。	88.2%	88.2%	100.0%
4	自分の教科を指導する際に、指導方法について工夫するようになった。	93.8%	94.1%	100.0%
5	自分の教科の中で、生徒の話し合いが活発に行われるようになった。	87.5%	82.4%	88.9%
6	他者の意見を取り入れようとする生徒が増えた。	70.6%	75.0%	88.9%
7	生徒間の対話に変化がみられることがある。	60.0%	88.2%	88.9%
8	人間道徳は、従来の道徳の時間よりも、生徒にとって価値のあるものだと思う。	82.4%	94.1%	100.0%
9	自教科でも「振り返り」を意識するようになった。	87.5%	82.4%	88.9%
10	教育課程のことを考えるようになった。	81.3%	82.4%	100.0%
11	従来の教育課程よりも、創造表現活動を設置した教育課程の方が生徒にとって良い。	87.5%	93.8%	94.1%

(2) 研究実施上の問題点と今後の課題

① コミュニケーション能力、創造的思考力の捉えと評価の難しさ

本研究開発で焦点をあてた 2 つの資質・能力は、先行研究をみても定義が様々である。社会的要請として求められているこれらの資質・能力の捉えを学校全体で共有することに難しさがあった。また、それらの資質・能力の高まりを見取ることについても同様であった。本校では、教員が求める生徒の具体的な姿を設定し、そのような姿が見られるように教育課程を開発した。

② 授業づくり・授業改善の視点の共有の難しさ

新領域の授業づくり・授業改善には、学校全体の共通理解が欠かせないが、それを実現することが難しかった。本校では、新領域の目的、目標、内容、方法を何度も見直し、修正し、研究授業を繰り返しながら、共通理解を図った³。

<今後の課題—本研究開発の発展に向けて—>

ア. 特別の教科道徳のその先へ

道徳が特別の教科となり、多くの現場で試行錯誤しながら実践されている。教科化に対する成果もあるが、当然課題もある。本校の人間道徳では、生徒自身が体験したことそのものが教材となり、自己を見つめ、自己の生き方・在り方を問い直す。そこでの気づきを、さらに次の活動（体験）につなげている。それは大きな学習の流れ（大単元構想）の中で自然に行われるため、気づきと態度がつながっていった。

イ. 中学校で育成すべき資質・能力の問い直し

様々な資質・能力が社会的要請として求められる一方で、すべてを中学校教育で意識して育むことは、何らかの弊害をもたらす。学校教育として、どのような資質・能力をどのように育むのかを問い直す必要がある。

上記 2 点について、本研究開発の成果と課題を踏まえて考察したい。これらのことが明らかにできれば、これからの学校教育で課題となりうることに対応可能となると考える。

³ 教員アンケート調査の記述にもあったが、新領域または自教科だけをみるのではなく、教育課程全体を見る目を教員自身もつことができるようになったことが、ねらいに即した授業への具現化につながると感じる。これは新学習指導要領に戸惑いを感じている教員にも通ずる部分であると考えられる。

香川大学教育学部附属高松中学校 教育課程表（平成 30 年度）

		各教科の授業時数									特別活動	道徳	総合的な学習の時間	新領域・創造表現活動	総授業時数
		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	英語					
第1学年	標準	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	35	50	-	1015
	本校	105	105	140	105	35	35	105	70	140	35	0	0	140	1015
	増減	-35	0	0	0	-10	-10	0	0	0	0	-35	-50	140	
第2学年	標準	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	35	70	-	1015
	本校	105	105	105	140	35	35	105	70	140	35	0	0	140	1015
	増減	-35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-35	-70	140	
第3学年	標準	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	35	70	-	1015
	本校	70	140	140	140	35	35	105	35	140	35	0	0	140	1015
	増減	-35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-35	-70	140	
計		280 (-105)	350	385	385	105 (-10)	105 (-10)	315	175	420	105	0 (-105)	0 (-190)	420 (+420)	3045 (0)

学校等の概要

1 学校名, 校長名

かがわだいがくきょういくがくぶふぞくたかまつちゅうがっこう
香川大学教育学部附属高松中学校, 佐藤 明宏

2 所在地, 電話番号, F A X 番号

かがわけんたかまつしかのつちょう
香川県高松市鹿角町394番地, 087-886-2121, 087-886-2124

3 学年別生徒数, 学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
107	3	119	3	121	3	347	9

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主管教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	0	1	1	0	15	0	1	0	0	4
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	0	28						